

日本の「英文法」ができるまで

目次

まえがき

序章 はじめに

中学生時代の思い出

わからなかった「現在完了」

江川泰一郎『英文法解説』に見る「現在完了」

日本の「学習英文法」＝英米で用いられた規範文法の改変版

第1部 ヨーロッパにおける文法研究の歴史——日本の「学習英文法」前史

第1章 ギリシア語文法からラテン語文法へ——古代～中世

- 1.1 世界史の流れから見る「学習英文法」
- 1.2 古代ギリシアの文法研究
- 1.3 アレクサンドリアでの文法研究
- 1.4 ローマ帝国の興隆
- 1.5 ラテン語とキリスト教
- 1.6 宗教と学問の言語としてのラテン語
- 1.7 ラテン語文法の世界
- 1.8 権威を失うローマ・カトリック教会と、宗教改革
- 1.9 英語の整備と改良に向けて

第2章 規範英文法の確立に向けて——16～18世紀

- 2.1 英文法の誕生——16世紀
- 2.2 錯綜する英文法体系——17世紀
- 2.3 「規範」への遠い道のり——挫折したアカデミー設立運動
- 2.4 解消されない混乱——18世紀の英文法
- 2.5 規範英文法の一応の成立

第2部 「学習英文法」体系はいかに作られたか

第3章 日本人と英文法との出会い

- 3.1 ラウスの規範と合理主義
- 3.2 18世紀後半の技術革新と工業化

- 3.3 イギリスのアジア進出
- 3.4 フェートン号事件の衝撃と英語学習
- 3.5 日本最初の英語品詞論——『諳厄利亜語林大成』
- 3.6 漢学にもとづく品詞理解
- 3.7 「蘭学」の勃興
- 3.8 日本における（蘭）文法研究の祖——中野柳圃
- 3.9 引き継がれる中野柳圃の学統——馬場佐十郎と吉雄権之助
- 3.10 相次ぐ英米船の出没
- 3.11 アヘン戦争の衝撃
- 3.12 「兵学」としての「英学」
- 3.13 "武器"としての英文法——日本最初の本格的な英文法書・『英文鑑』
- 3.14 リンドレー・マレー
- 3.15 マレーの文法
- 3.16 マレーとラウスの文法の比較
- 3.17 『英文鑑』の歴史的位置づけ

第4章 本格化する英文法の「作り変え」——幕末～明治初年期

- 4.1 蘭学から英学へ
- 4.2 幕末英文法の中心・『英吉利文典』
- 4.3 引き継がれる「英学」——明治初年期
- 4.4 明治初年期における英文法——ピネオとカッケンボスの文法書
- 4.5 『英吉利文典』、ピネオ、カッケンボスの文法書の内容
 - 4.5.1 品詞論の内容
 - 4.5.2 『英吉利文典』および、ピネオとカッケンボスの文法書の特徴
- 4.6 舶来の英文法を「活用しつづける」
- 4.7 舶来の英文法を「作り変える」
- 4.8 フランシス・ブリンクリーと『語学独案内』
 - 4.8.1 『語学独案内』の内容
 - 4.8.2 『語学独案内』の歴史的位置づけ
- 4.9 ブリンクリーの多方面にわたる活動
- 4.10 ブリンクリーの英文法教育への思い

第5章 英文法体系の進展——明治10～20年代

- 5.1 つづけられた独立までの努力
- 5.2 輸入されたブラウン、スウィントン、ベインの文法書
 - 5.2.1 引き継がれた規範英文法の枠組み
 - 5.2.2 もたらされた体系上の進展
- 5.3 継承される「作り変え」の動き
- 5.4 明治中期における文法書の作家たち

- 5.5 輸入されたインド人向けの英文法書
- 5.6 加速する「作り変え」の動き

第6章 「学習英文法」体系の完成——明治30年代

- 6.1 終焉に向かう「英学」
- 6.2 時代転換期における、「学習英文法」の一応の完成
- 6.3 「学習英文法」と「イディオモロジー」
- 6.4 斎藤秀三郎の略歴
- 6.5 斎藤による文法観の転換
- 6.6 精密な意味分析と連動した横断的解説
- 6.7 斎藤秀三郎の動詞論——態、時制、法、助動詞、動詞の型
- 6.8 「使役動詞」と「知覚動詞」の誕生
- 6.9 「全否定・部分否定」、「形式主語／目的語」、「意味上の主語」の誕生
- 6.10 「分詞構文」の誕生
- 6.11 もう1つの「作り変え」——日英対照論
- 6.12 斎藤秀三郎とプリンクラー

第3部 「学習英文法」はいかに意味づけられたか

第7章 英文法の学習・教授法小史——幕末～明治40年代

- 7.1 2人の英語教師の嘆き
- 7.2 「英学」を支えた私塾
- 7.3 慶應義塾における読書法
- 7.4 「素読」と「会読」
- 7.5 文法理論偏重型の学習法
- 7.6 広く行われたパーシング
- 7.7 「学」から「教」への転換
- 7.8 相次ぐ「英語教授法」書の出現
- 7.9 英文法「教授法」改革の動き
- 7.10 唱導される帰納的「教授法」
- 7.11 制度化された帰納的「教授法」

第8章 英文法排撃論の興隆——明治30～40年代

- 8.1 熱を帯びる英語「教授」・学習論
- 8.2 英文法排撃論の登場
- 8.3 英文法と「小供・習慣」
- 8.4 英文法をめぐる混乱
- 8.5 窮地に立たされる英文法
- 8.6 民間の英語産業の動き

- 8.7 「商権拡張の一武器」となった英語
- 8.8 実業界に進出しはじめる「学校出」青年たち
- 8.9 「学校出」に要求された「実用英語」
- 8.10 学卒者の英語力への不満
- 8.11 「実業家の教育家に対する要求」
- 8.12 就職と直結する「実用英語」
- 8.13 第1次世界大戦と「大戦景気」
- 8.14 浸透する「実用英語」
- 8.15 「実用英語」と英文法排撃論

第9章 英文法排撃論への反論活動——明治30～40年代

- 9.1 実業界関係者による英文法排撃論
- 9.2 英文法擁護論の一例——生田長江による反論
- 9.3 窮地に立たされる斎藤秀三郎
- 9.4 斎藤の門下生たちによる英文法擁護論
- 9.5 「英文法」とブリンクリー
- 9.6 「普通教育」における英文法の意義
- 9.7 英文法をめぐる論争のまとめ

第10章 「英語教育」の手段となった英文法——明治40年代

- 10.1 英文法と「英語教育」、そして「英語教育」と「国語」・「国民」
- 10.2 「英語教育」への胎動——「教授法」から、英語科の目的論へ
- 10.3 目的論者たちの共通点
- 10.4 明治教育学の歩みと、「教育」の意味
- 10.5 「教授」に期待された「実用と教養」
- 10.6 「実用と教養」を表す様々な言葉
- 10.7 「英語教育」の誕生——岡倉由三郎著『英語教育』（1911）
- 10.8 教養・国家・「国語」・「英語教育」
- 10.9 英文法と「英語教育」
- 10.10 なぜ「読書力の養成」が「実用的価値」とされたのか
- 10.11 「読本」にもとづく帰納的文法「教授法」
- 10.12 抽象的思考訓練の具としての英文法
- 10.13 「国語」・「国文法」への省察をもたらす具としての英文法
- 10.14 文化創造型教養主義語学の体制としての「英語教育」

終章 おわりに——中間的メタ言語となった「学習英文法」

あとがき

参考文献
索 引
函版提供